

# 教職科目「教職実践演習」の実践とその課題 ——「スーパーのチラシで『世界食品輸入地図』を作ろう」を題材に——

舛田 弘子<sup>1</sup>

## 要 旨

中学校および高等学校の教育職員免許状取得の際、必修科目として位置づけられている演習科目「教職実践演習」は、「教員への志向はあるものの、必ずしも動機づけの高くない忙しい学生達を対象に、実際の活動をさせつつ、彼らにとって今後においても役に立つ可能性のある内容を、発見・対話・気付きを通じて学ばせる」ことが重要である。そこで、工藤（1993）によって提案され、渡辺（1993）、野坂（1996）などが小学生を対象とした実践例を持つ「世界食品輸入地図」を、(1)素材からの教材作りを学べる、(2)能動的・主体的な活動ができる、(3)食品の種類、その生産地である地名・国名とその位置を再学習できるなどの効果を期待して実施した。学生の活動および感想等から分析したところ、研究1では上記の効果が概ね観察されたが、複数の異なる教科への本実践の適用、および時間配分などに課題が残った。研究2ではこれらの点について改訂し、期待された効果を同様に確認することが出来た。これらの結果から、この教材の大学生における有効性もまた示されたと考えられる。

キーワード：大学生、教職実践演習、教授プラン「世界食品輸入地図」、素材の教材化、能動的学習

## 1. 問題と目的

### 1.1 「教職実践演習（仮称）」とその目的及び課題

本研究で取り扱う「教職実践演習」とは、中学校および高等学校の教育職員免許状（以下、教員免許とする）を取得する場合、必修科目として位置づけられている演習科目である。「教育職員免許法施行規則」によれば、「教職実践演習は、当該演習を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする。（第6条の1の表、備考欄十一）」とされている。文部科学省（2006）による「科目の目的」ではより詳細に、「教職実践演習（仮称）は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』

として位置付けられるもの」とされている。本学では他の多くの大学と同様に、これは4年次の必修科目となっている。

ところで、本学を含む私立の大学は「開放性」、すなわち、教育職員免許法（昭和24年法律147号）によって規定されているように、「文部科学省の認定を受けた教職課程をもつ大学等において所要の単位を修得すれば免許状を取得可能である」というシステムによって学生に教員免許を取得させる体制をとっているところが多い。これは、教員免許を取得する人の専門領域や資質に多様性を持たせるという点からすると優れた方法であると考えられる。一方で、教員養成系の大学等では多くの学生が入学時から教員になるための強い志向や動機づけを抱いているのとは異なり、本学を含む開放性の大学では、学生はそもそも教員免許を「数ある資格のうちの一つ」と捉えているに過ぎず、教職に就くことへの動機づけが弱いものも散見される。また、近年、教員の労働環境を「ブラック」、つまり劣悪かつ非人道的であるとする見方が広まっている。学生から教育実習の感想を聞けば、高校生・中学生との交

<sup>1</sup> 札幌学院大学 人文学部; masuda@sgu.ac.jp.

流は楽しいし、教師の仕事にやりがいも感じると受け止めている。しかし、教員採用試験を受け続けても、正規採用の教員になれるかどうかは保証されていないし、なれたとしても労働条件が悪いとなれば、本当に教員を目指してよいのかと疑問が生じるのは当然であろう。実際、教育実習に行ってみて、教員の仕事の忙しさを改めて痛感したとして、進路変更を行った学生も存在する<sup>(1)</sup>。これらの複合的な理由から、教員採用試験を終えた4年次後期ともなれば、本学の学生においては既に教員を諦め一般企業等への就職を決めている者がほとんどである。また一部の学生にとっては、卒業論文作成に忙しい時期でもある。従って、学生達の本授業への動機づけは残念ながら必ずしも高いとは言えない。この「動機づけの低さ」が本授業を運営するにあたっての第一の課題である。

加えてこの科目は「演習科目」とされている。文部科学省(2006)は、「本科目には、教員として求められる以下の4つの事項を含めることが適当である。使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 社会性や対人関係能力に関する事項 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項 教科・保育内容等の指導力に関する事項」としている。また、授業内容・方法では「課程認定大学が有する知見を結集して、理論と実践の有機的な統合が図られるような新たな授業方法を積極的に開発・工夫することが重要である。具体的には、授業内容に応じて、例えば教室での役割演技(ロールプレイング)やグループ討論、実技指導のほか、学校や教育委員会等との協力により、実務実習や事例研究、現地調査(フィールドワーク)、模擬授業等を取り入れることなどが考えられる。」としている。一見内容は幅広く、様々なことを実践できるようにも思えるが、学生が実際に何らかの活動をする必要があると考えられる。これが第二の課題である。

最後に、これは筆者の私見であるが、特に開放系の教員免許状取得のシステムをとる大学において、教職課程の授業は、必ずしも教師になることを目指す人ばかりを対象とするべきではないと考える。これは、結局学生は教職に就く者ばかりではないから、教師としての資質や専門性の育成に手を抜いてもよいという意味では全くない。むしろ、教師としてのものの見方や考え方、行動の仕方、また身に着けた専門的な知識は、たとえ教職には就かなかつたとしても、学生が社会人や親になった際に大いに有用であるために、それらを

積極的に学んでもらう必要があるという意味である。そのためには、教師になるべく学んだ内容が、実際に教師にならなければ使えないというのではなく、知識となりスキルとなって、学生たちの役に立つ可能性があるのだということを実感させる必要がある。これらのことは、教職実践演習のもとと意図しているところでは必ずしもないが、本学のような大学にはむしろ必要なことであると考え。これを実現するためには、活動をしながら、問題を発見すること、他者との協働や相互作用を通じて、自らの考えを広げたり深めたりすることなどを組み込んだ学習内容にする必要がある。これが、第三の課題である。

ここまであげてきた3つの課題をまとめると、「教員への志向はあるものの、必ずしも動機づけの高くない忙しい学生達を対象に、実際の活動をさせつつ、彼らにとって今後においても役に立つ可能性のある内容を、発見・対話・気付きを通じて学ばせる」というのが、筆者(授業者)に与えられた課題と言える。

## 1.2 「スーパーのチラシで『世界食品輸入地図』を作ろう」について

### 1.2.1 教材の概略

「スーパーのチラシで『世界食品輸入地図』を作ろう」は、工藤(1993)によって提案された小学校5年生向けの教材を指す。工藤(1993)は、「小学校5年の社会科では『運輸』に関して学習することになっています。…(中略)…子どもたちに『食卓の国際化』を実感してもらうにはどうしたらよいか考えてみました。すぐに思いつくのは、実際にスーパーなどに行って、輸入食品を調べてみるのですが…(中略)…何か良い方法はないかと考えていたところ、新聞の折り込み広告の中に混じっているスーパーのチラシに、食品の写真とともに輸入元が書かれているものがあることに気がつきました。これを使って、『世界食品輸入地図』を作ってみたらどうだろうというのが、この提案です。(p.46)」としている。

方法は、(1)児童に食品とその輸入元が書かれたスーパーのチラシを持ってきてもらう(教員が集めてもよい、同僚教師に協力してもらうのもよい)、(2)チラシの該当部分を食品ごとに切りとらせ、(3)教室の壁に大きな白地図を貼り、切り取った食品の写真をその輸入元の国の上に貼りつけさせる(輸入元の国がどこにあるのかを探させるためには、白地図の隣に世界地図

を貼っておくのがよい), というものである。

更に工藤(1996)は, 作成した地図を見ながら児童と考える際の発問例として, 「輸入国はどのように散らばっているでしょう?」, 「肉・魚はどの国から輸入されているでしょう?」等をあげている。さらにこの活動をきっかけに, 実際の統計資料を利用するなどの提言もある。また, 輸入の問題に絡めて扱うだけでなく, 世界の国を知る題材としても使えるとしている。

### 1.2.2 先行する実践例

#### (1) 渡辺実践 (1993)

上記の提案を元に, 渡辺(宮城県・原町小学校:1993当時)は, 宮城県の小学5年生と, 輸入水産物, 輸入畜産物, 輸入農産物のそれぞれについて, 3回に分けて世界食品輸入地図を作成した。いずれも, チラシ, 白地図(A3判)を用意する。40分の授業時間のうち35分間を使って, 教師が児童とやり取りをしながら自ら白地図にチラシを貼っていき, 児童は出てきた国名・地名について自分の白地図から探して色を塗り, また品物の名前を記入する。残り時間のうち, 3分間でその活動の感想をまとめさせている。ただし, 輸入農産物に関しては量が多く, 2時間を要したとある。

この授業の結果, 輸入水産物に関しては, 児童からの疑問「アラスカ・アメリカからなんでこんなに多いの?」, 「アラスカ・アメリカからは買わないで, 自分たちでとれば?」に応じる形で, 資料集から「世界の200海里漁業水域と日本の主な漁場」, 「遠洋漁業の生産高」, 教科書「狭くなった漁場」の読み取りなどによって, 日本の漁業について考えを深めさせている。また, 輸入農産物に関しては, 資料集の「農薬シャワー」ということばに反応して児童が自ら疑問を提示している(例「発がん性って, がんになるの?」, 「枯葉剤って何?」)。いずれも, 単に食品の輸入の知識を得ただけにとどまらず, 児童が主体的に学ぶきっかけを作っていると言える。

#### (2) 野坂実践 (1996)

野坂(宮城県・名取市立増田小学校:1996当時)は, 宮城県名取市の小学5年生と, 輸入食品だけでなく国産の食品にも拡げて食品地図を作成した。この実践では, 前述した工藤(1993)の提案した方法に加え, (1)春(5月), 秋(10月), 冬(2月)の3回, 季節ごとの生鮮食料品を対象にしていること, (2)自分たちの作った資料(地図)と統計資料を比べて, 作った資料の正確

さを確かめる活動を行っていること, (3)日本全国から送られるようになったわけを考える機会を持っていること, の3つを行っている。

しかし, この方法の追加は授業者が最初から意図したものではなかったようである。まず(1)の季節ごとの調査についてだが, 最初に5月の地図作りに取り組んだ子どもたちから自発的に, 「季節が違えば資料やわかったことも違ってくるのか。(p.3)」という疑問が出て, 「春・夏・秋・冬と季節ごとの追跡調査をやろう。(p.3)」という提案がなされている。これを受ける形で, 秋及び冬の授業が行われているのである。また, (2)についても, 「しかし, ここに『自分たちの作り上げた資料がはたして本当に正当なものなのか』という疑問が子どもたちの中から生まれた。この疑問についても, 新しい統計資料と比べ, 自分たちの力で納得がいくまで調べた。その結果, 十分信頼できるものと確信したらしく, 今までの学習では味わうことのできなかつた成就感を味わうことができたようだ。(p.3)」とあることから, 子供たちの自発的な活動があり, それを教師がサポートしたものと推測できる。(3)については, 作成したチラシの地図, 「野菜の取れ高と主要生産県(表)」および「仙台市中央卸売市場で取引される野菜の量(グラフ)」を用いて, 名取市や周辺の市で販売されている食品が全国の主要生産県から運ばれていることを確認し, また鮮度を落とさないための工夫や, 輸送に使う時間の短縮の理由などを考えさせている。

### 1.3 本教材の実践により期待できる効果

上記2つの実践から, この教材がさまざまな気づきや発展的な学習を生むとともに, 児童の興味を引くものであることがわかる。もちろんこれは小学生向けの教材および実践ではあるが, 工夫によっては教師を目指す大学生にも十分応用可能なものであると考えられる。具体的には, 以下のような効果を期待できる。

#### (1) 素材からの教材作りを学べる

教科書, 資料集といった既存の教材を使用するだけではなく, 身近な素材(本教材の場合はチラシなど)を使って教材を作ることを実践的に学ぶことができる。また教科書等を用いない教材が, 特定の目標のもとに利用されていることを意識化するのも重要である。これは, 作成した教材の利点を理解するだけでなく, それを学習指導要領の内容に関係づけることによって行うことができると考えられるが, これらにつ

いても学ぶことが出来る。

## (2)能動的・主体的な活動ができる

チラシから食材を選択して切り抜くこと、切り抜いた食材を整理して見やすく貼っていく方法、そこから見いだせることは何か考えたり議論したりすることなどについて、個人や集団で能動的・主体的な活動ができる。特に、「教師として中学生・高校生に実践させるにはどうしたらよいか」という視点を学習者に取らせることが重要である。これにより、単に自分たちがどうするか・どうできるかだけでなく、教師として学習者の学習を援助する活動を円滑に進めるにはどうしたらよいかということに考えを深めさせることができる。

## (3)食品の種類、その生産地である地名・国名とその位置を再学習できる

本提案は元々小学5年生向けではあるが、大学生でも普段利用している食材の生産地等には知識や関心が高くないと考えられる。また、同様に生産地の地名・国名やその位置がすぐ同定できるとは限らない。これらについて、この活動を通じて再学習できる。また、(2)と同様、「教師の視点」を取らせることで、学習者の状況に沿って援助することについて考えさせることができる。

本研究では、学生の発言や活動のようす、感想等を通じて、上記(1)～(3)の効果の実現について以後検討する。

## 2. 研究1

### 2.1 対象となった授業および期間

2018年後期の「教職実践演習」の授業。数名の教員による共同開講であり、筆者が授業者として2回(15回中)担当した。

### 2.2 学習者

上記1.を受講した学生16名。2クラスあり、Aクラスは社会科(中高)8名、Bクラスは商業(高)4名と英語(中高)5名の9名である。Aクラスは2グループに分け、Bクラスは教科別の2グループとした。

### 2.3 準備したもの

(1)白地図：インターネット上から日本地図と世界地図のフリー画像を取得し、模造紙サイズで拡大印刷した。いずれも国や県の境界線のみで、国名・県

名の記述はない。各グループに日本・世界地図を1枚ずつ計2枚配布した。

(2)「中学校社会科地図」帝国書院版：各グループに2冊ずつ配布した。

(3)はさみ・のり：人数分を配布した。

(4)チラシ：2018年10月に北海道札幌市で新聞の折り込み広告として配布されたチラシ(約1か月分)と、同年同月宮城県仙台市で同様に配布されたチラシ(同上)を使用した。札幌市のチラシは授業者が独自に収集し、仙台市のチラシは仙台市在住の友人に収集を依頼した。教員が単独でチラシを集めることにした理由は、新聞を独自で定期購入している学生および家庭が少なく、学生にチラシの持参を求めるのは困難であると予想したためである。また、札幌市と仙台市の2つを選択した理由は、授業者単独では学生に比してチラシの数が少ないことを危惧したこと、札幌市と仙台市の2つの都市を比較することによって、物流の違いなどをより明示的にする効果を狙ったものである。Aクラスには札幌市のチラシ、Bクラスの商業グループに仙台市のチラシ、英語グループに札幌市のチラシを利用させた。

(5)授業プリント：各時について授業の目標や活動の流れ、まとめや感想の記述欄などを列挙したプリントを作成して配布した。

## 2.4 授業の流れ(付録参照)

### 2.4.1 第1時

(1)素材を教材化する上で前提となる事項についての解説

既に「本教材の実践により期待できる効果」の(1)のところで述べたように、教科書以外の教材を使用する場合には、教員がその教材をなぜ使用するかについて意識的にならねばならないと考えられる。そのためには、教材・教具について理解するとともに、教材・教具と教科内容との関係、また、既存の教科書等を使う場合と、今回のように素材を教材化する場合の利点・欠点等について、改めて確認する必要がある。これらについて解説を行った。

(2)食品地図の作成法についての説明・食品地図の作成

スーパーのチラシから、産地がわかる食品を切り抜き、それを地図(世界地図、日本地図)に貼るよう指示

した。その際には、見た目が美しく、わかりやすくするよう工夫することと、同一食品が同一場所に複数個ある場合は、貼り方を工夫するなど、最低限の注意のみを与え、あとは学習者に自由に作業をさせるようにした。

### (3)活動によって気づいたこと等のまとめと感想との記述

出来上がった地図を見ながら、グループごとに意見を出しあって、気づいたことをまとめていくように指示した。最後の感想については個人のもを書くようにさせた。これらについてはプリントごと回収した。

## 2.4.2 第2時

### (1)学習指導要領と食品地図を使った活動をどう関係づけるか考える

最初に、第1時のプリントを返却し、前回考えたことを振り返りながら今回の授業に取り組むよう指示した。続いて、学習指導要領の抜粋を提示し、今回の食品地図作りが関連つきそうな学習指導要領の内容に個人ごとにアンダーラインを引かせて発表させた。これについても、「本教材の実践により期待できる効果」の(1)のところで述べたが、素材を教材化する際に考えるべきこととして行わせた。

### (2)上記(1)を元にした授業プランの作成

(1)での関係づけをもとに、この食品地図作りを組み込んだ1時間(50分)の授業プランをグループで考えさせた。まずは「本時の目標」を設定させ、その後、「導入・展開・終結」の流れに従って、生徒の活動と教師の活動をそれぞれできるだけ具体的に考えさせた。英語科については、食品地図と英語の学習との関連付けが困難であろうことが想定される。これを解消すべく、「食品地図の情報を活用したスキット(外国語会話練習のための寸劇)を作成する」など、授業プランづくりへの明確な方向づけを行った。

### (3)授業プランの発表と意見交換

上記(2)で作成した授業プランを、グループの代表者に発表してもらった。各クラス2グループあるので、聞いているグループから、一人ひとり意見や感想を言ってもらった。

### (4)活動によって気づいたこと等のまとめと感想の記述

全体の感想の記述を求めた後、プリントを回収した。

## 2.5 結果と考察

### 2.5.1 学習者のようす

学習者たちは、概してリラックスして、私語を挟みながら楽しげに活動を行っていた。活動に関係のない私語を挟むことは不真面目・不適切と捉えられる可能性はあるが、今回は特に問題とはしなかった。なぜならば、問題と目的のところで述べたように、ただでさえ動機づけがあまり高くない学生たちであるため、必要な会話だけしか認めずひたすら切って貼る活動だけに集中させることによって、受動的に「やらされて」活動している印象を強めることを恐れたためである。実際は、授業とまったく関係のない私語は多くはなく、現在の取り組み(例:見つけた新しい食品や産地)や、教育実習先での思い出などを語り合っているのが散見された。

一方で問題となる点としては、地名・国名によって位置の同定が困難であることであった。これはほとんどの学習者に多かれ少なかれ認められた。これらの学習者達の基礎学力が教師としてふさわしいものであるかという点からすると、これ自体もちろん看過できないことではある。しかし、さらに問題なのは、位置の同定が困難である際に、調べずに推測で作業する学習者が存在したことである。これは、ある意味で「わからない自分」のごまかしである。つまり、自分がわからないことを放置せず、丁寧に確認し、知識を確実なものにしていく習慣が身につけていないことの表れと考えられる。これについては、机間巡視を行って、授業者が気づき次第地図帳で調べるよう指導した。

また、学習者たちの切り貼り作業および議論に筆者の事前の想定以上の時間を要したため、他の活動のために必要な時間が足りなくなったことも問題点として挙げられる。これは、授業者の見通しの甘さからきていることであり、学習者たちの動きが十分理解できていなかったことによる。また、欠席者がいたため、グループの人数が3名と少なくなってしまったところがあった。このことにより、十分な手が足りず、時間を要してしまった側面もあるかもしれない。これについては、今後の時間配分の改定を考えるとともに、グループの適正人数についても配慮する必要があることが明らかとなった。

### 2.5.2 作成された授業プラン

グループ別に4種類の授業プランが作成された

表1 各グループの授業プランの概略

| グループ | 本時の目標                       | 授業の流れ   |
|------|-----------------------------|---|
| 社会1  | チラシから日本の農水産業を読み取ろう          | 食品地図の作成法の理解→地図作成→気づいたことの話し合い→キーワード「食料自給率」の提示→日本の食料自給率の予想→正解提示（中学生対象）                |
| 社会2  | チラシから物流と地理的特色を知ろう           | 食料自給率のデータを提示、輸入について説明→地図の作成法の理解→輸入食品を探す→話し合い・まとめ→発表活動（中学生対象）                        |
| 商業   | 「流通」の前提としての「生産と消費の隔たり」を理解する | 「生産と消費の隔たり」の用語説明→食品地図の作成法の理解→地図作成→気づいたことの話し合い→流通の役割の理解に繋げる（高校生対象）                   |
| 英語   | 比較級を使おう                     | （営業マンになったつもりで食品地図から食品を紹介）<br>比較級の確認→グループ毎に発表する食品と台詞の決定→30秒で発表→最優秀を決定→比較級のまとめ（中学生対象） |

(表1). 社会科グループは2つとも「食料自給率」に着目したプランを作成した。ただし、グループ1は国産品に焦点化し、食料自給率は最後にまとめのキーワードとして用いたのに対し、グループ2は外国からの輸入品に着目し、最初に同じキーワードを提示してから作業を始めさせたところに違いがあった。商業グループは「食品の生産と消費の隔たり」から「流通」の理解に繋げるプランを作成した。英語グループは「cheaper, bigger 等形容詞の比較級を使って、地図を見ながら英語で食品を紹介する」プランを作成した。この授業プラン作成と発表活動について、学生からは、「同じ題材を使っているけど教科によって活用の仕方がこんなにも違うというのは勉強になった。(商業:学生の主免許の教科, 以下同じ)」等の感想が得られた。

### 2.5.3 感想等による効果の検討

以下、1.3で示した(1)~(3)に関連する感想等を見ていく。

(1)「素材からの教材作りを学べる」についての感想等  
6名(社会4名, 商業2名)が関連する内容について言及していた。以下、例を挙げる。「チラシと地図で、国や都道府県を覚えたり、食品の産地に気づくことができた。そこから様々な授業ができるので、すごくいい手だと思った。(社会)」「普通の授業のような教科書とノートを使う授業ではなく、身近でありながら授業ではあまり使わないチラシを使うことによって、生徒の関心を強めることができるのではないかと思います。(社会)」「3つの隔たりをチラシや地図を見て確認させることによってよりわかりやすく簡単に覚えることができるのではないかなと感じた。(商業)」「実際に指導案を作ってみると、商業の学習の中でもとても重要な箇所であると言うことに気がつい

た。消費と生産の隔たりというのは、商業を学習したことのない人達にとっては分かりづらい内容であったと思うが、例を出して説明すると、すぐに理解してもらえるとということだったので、よかった。(商業)」

興味深いのは、この6名は全員、2019年春に卒業後、教員の道を歩んでいることである。つまり、この4年後期の時点で、教員になるという意志を固めている学生にとっては、素材の教材化が自分に必要なこととして身近に感じられた可能性がある。一方で、教員を特に志さない学生にとっては、この活動を通じては、教材を考えることの積極的な意味合いを十分に伝えきれなかったのかもしれない。

(2)「能動的・主体的な活動ができる」について

10名(社会6名, 英語2名, 商業2名)が関連する内容について言及していた。以下、例を挙げる。「仲間と話し合うことでグループワークもより活性化されていくので、頭に入って来やすいワークだった。(社会)」「一人で考えるのではなく、グループで考えることで、自分が考えなかった案などが出るので、グループで指導案を考えるのはとてもいいなと思いました。(社会)」「周りと協力して作業ができる。(英語)」「グループでやるのが面白いと感じた。(英語)」「授業の構成を話し合いで進めるのは難しいと感じました。ですが、自分の気がつかなかった点も見つかり、議論をしてよかったと感じました。(商業)」

学生たちとのパーソナル・コミュニケーションによれば、授業プラン(指導案)は、教員の指導は受けるものの、基本的には個人で考えるものであり、それを模擬授業等で発表した際に、他の学生の意見をもらうことはあっても、共同で授業案を考えたい経験はなかったということであった。筆者の学生時代からの経験では、授業プランを共同で考え、実施し、結果を分析す

ることは、単に授業をつくることを超えて多くの積極的な意味を持ちうる。たとえば、現在注目されている「チーム学校」という考え方然り、また、企業等で協働でプロジェクトを行う場合然りである。従って、大学卒業間際の時期に、学生たちにこのような経験をさせ得たことは評価できるだろう。

(3)「食品の種類、その生産地である地名・国名とその位置を再学習できる」について

全学生が何らかについて言及していた。以下、例を挙げる。「アジア・アフリカの産地が少ない。外国は肉や魚の産地が多い。東京周辺に産地が分布（近郊農業）。山陰/北陸の産地少ない（社会）」「フィリピンはバナナ・パイが多く、ニュージーランドはキウイが多いといった、『この食品はこの国』という傾向がある。アフリカ方面のものはほぼなく、ヨーロッパ方面は魚（サーモン、鯨、カレイ）が多い。→船で輸入することが多いから？（英語）」「関西方面でとれる食品があまり東北地方に来ない。10月なので仕入れる商品に限られている。時期的なものが大きく影響されている。（商業）」「中部地方・関西地方・中国地方の産地が少ない。時期的なこともあり、旬の食材を仕入れている。値段は輸入品が安い。（商業）」

これらのさまざまな気づきに加え、時には教員に促されつつではあるが、地図を見て国・地域の場所を特定するなどの機会を持つことができていた。

## 2.6 まとめと課題

身近な素材を教材化し、授業プランを作るこの試みについて、授業の様子および感想から見ても、学生は概ね好意的に受け止め、授業者が期待した効果も実現できたと考えられる。

一方で課題もある。まず、予想されていたことではあるが、本教材の意義を理解させつつ複数の教科に同時に適用することの難しさが改めて浮き彫りとなった。資料を見てもわかるとおり、社会科、英語科、商業科それぞれで、学習指導要領から見ても、本実践との関連付けは十分可能である。しかし、やはり社会科や商業科の学生たちの方が、自分たちが教職課程の学習の中で経験していることや、小学校から高校に至る社会科（地理・公民等）の学習経験を用いることで、今回の食品地図づくりをどう自らの教科の授業に生かせばよいかを考えやすかったものと考えられる。英語科の学生たちも、結果として比較級を使ったスキット

を考えることはできたが、食品地図づくりとの関連性をより理解できるような教員側の働きかけが必要となると考えられる。

また、「学習者のようす」のところで既に記述したが、地図作成や授業プラン作成・発表・意見交換の時間配分への配慮等にも課題があった。本実践を今後教職実践演習で行うためには、これらの点で改訂を要する。

## 3. 研究2

研究1での課題を踏まえ、新たな学生を対象に、研究2を行った。

### 3.1 対象となった授業および期間

2019年後期の「教職実践演習」の授業。研究1同様数名の教員による共同開講であり、筆者が授業者として3回（15回中）担当した。

### 3.2 学習者

上記3.1を受講した学生8名。研究2では社会科（中高）のみを対象とした。これは、社会科クラスと商業・英語クラスの開講時間のバランスが崩れたことによる。担当者間の事情から、社会科クラスは3回中1回目と連続した2～3回目の間が1か月以上開き、商業・英語クラスは3回連続の開講となった。このことによって、両クラスで同一の内容を行うことは難しくなったため、結果として社会科のみを対象に、研究1と同様2回の講義時間で本実践を行うこととした。

### 3.3 準備したもの

研究1同様、(1)白地図（日本・世界地図を1枚ずつ計2枚）、(2)「中学校社会科地図」帝国書院版（2冊）、(3)はさみ・のり（人数分）、(4)チラシ（2019年10月に北海道札幌市で新聞の折り込み広告として配布されたチラシ約1か月分）、(5)授業プリントを準備した。授業プリント自体には特に改訂は行っていない。

### 3.4 授業の流れ（付録参照）

#### 3.4.1 第1時

研究1同様、(1)素材を教材化する上で前提となる事項についての解説、(2)食品地図の作成法についての説明・食品地図の作成、(3)活動によって気づいたこと等のまとめと感想との記述の順で行った。主な改定点は以下の3点である。

### (1)食品地図（完成品）の提示

食品地図のイメージを持たせるために、研究1において作成された食品地図を提示した。これによって、自分たちの作業が何を目標しているのかを明示的に理解させることが目的であった。

### (2)グループ人数の調整と時間制限

出席したのが6名であったため、グループの人数の適正化の点から複数のグループにすることをやめ、1グループでの活動とした。グループの人数が想定よりも多いため、時間をかけ過ぎると飽きる、気が散るなどの可能性が想定された。ここからチラシの切り貼りの時間を30分と制限し、時間内で効率的に貼っていくよう指示した。

### (3)気づいたことの発表と板書

(2)の改定で時間に多少余裕ができたため、(3)では単に記述させるだけではなく、個人ごとに気づいたことを発表させ、板書する活動も取り入れた。これによって、学習者の個別の考えだけではなく、それをまとめることや、教員の感想や促進的なコメントなどを全体で共有することを意図した。

## 3.4.2 第2時

研究1同様、(1)学習指導要領と食品地図を使った活動をどう関係づけるか考える、(2)上記(1)を元にした授業プランの作成、(3)授業プランの発表、(4)活動によって気づいたことのまとめと感想の記述の順で行った。主な改定・変更点は以下の点である。

### (1)グループ人数の調整と時間制限

出席したのが6名（前回とも出席したのは4名）であったため、前回同様1グループでの活動とした。これに伴い、授業プランを考える時間も40分と制限した。

### (2)授業プランについての意見交換

上述のように1グループ構成であるため、残念ながら他のグループからの感想・コメントを得る活動は断念した。そのかわり、教員から質問やコメントを提示し、学習者たちに口頭で答えてもらった。

## 3.5 結果と考察

### 3.5.1 学習者のようす

研究1同様、学習者たちは、概してリラックスして、楽しげに活動を行っていた。

問題となる点としては、やはり、地名・国名によって位置の同定が困難であることであった。2年連続し

てこの問題が現れたということで、今後の指導を改めて考える必要があるだろう。

一方で良かった点としては、今年度の学習者たちは地図帳で調べることを億劫がらずに行っていたことである。また、時間配分とグループ人数についての改定を行ったことが功を奏し、余裕をもって切り貼りや議論を行うことができていた。

### 3.5.2 作成された授業プラン

授業者は当初、研究1同様1時間（50分）で行えるプランを考えるように指示したが、学習者らの希望により2時間つづきの授業プランとして構想することになった。学習者側の理由としては、まず、中学生を対象とした場合、チラシの切り貼りに時間がかかると考えられることが挙げられた。「中学生はこの活動を面白がるだろうから、時間をかけてやったほうがよい」というのである。これは、彼ら自身もこの活動を楽しんだということの証拠とも考えられ、授業者からみて望ましい反応と言える。またもう一つの理由として、「発表活動などをしっかり行わせたいが、その場合は2時間続けて行った方が、地図作りの記憶があるために行いやすいのではないか」という意見も出た。これらは両方とも妥当な意見であると認められるために、それを受け入れ、作成されたのが表2のプランである。

### 3.5.3 感想等による効果の検討

以下、(1)～(3)に関連する感想等を見ていく。

#### (1)「素材からの教材作りを学べる」についての感想等

2名が関連する内容について言及していた。以下、例を挙げる。「今回のように身近な教材を用いて授業を行うことによって、教科書を使うだけではたどり着かないような『気づき・発見』ができると思う。この『気づき・発見』は、生徒の頭や記憶にも残りやすいし、『生きる力』にもつながっていくと思うので、教師は世の中のいたるところにアンテナを立て、教材化の視点を持つことが大切だと思う。」「生徒にとって自分の身の回りのことや日常生活に大きく関係する内容が授業だと、大変盛り上がり熱心に活動すると思った。普段あまり見ることのないチラシでさえ、授業を通して新しい発見があり、面白いと思う。」昨年と比べ、教材作りの視点がやや少ない印象である。この原因としては、第1時「(1)素材を教材化する上で前提となる事項についての解説」において、素材を教材化することに

表2 授業プランの概略

| グループ | 本時の目標   | 授業の流れ（生徒の活動・教師の活動）  |
|------|---|---|
| 社会   | 大小さまざまな地域から成り立っている日本や世界の地域を比較し、考察し、地域産業について理解しよう（2時間構成） | <p>導入（10分） 挨拶→発問「昨日の給食何食べましたか？」→食材の写真などを用意しておき、黒板に貼る、また生徒にも言わせる・貼らせる</p> <p>展開1（40分） 作業分担の指示、はさみなどを使う時の注意、まとめプリントの配布→生徒は作業→気づいた点をまとめさせる→質疑応答の準備</p> <p>展開2（40分） 討論会 4グループ各10分ずつで質疑応答、グループの発表は6～7分、質疑は3分程度→よい意見は板書する、できるだけ話し合いに口は出さず、あくまでも生徒主体</p> <p>終結（10分） 生徒による本時のまとめ、感想→教員により、本時の目標・内容を振り返る</p> |

ついでの説明が不十分であり、そのために学生の理解が十分に活性化されなかった可能性があげられる。

(2)「能動的・主体的な活動ができる」について

5名が関連する内容について言及していた。以下、例を挙げる。「座学だけでなく、作業やコミュニケーションを多くとれる授業がこれから必要だと思いました。」「これまで複数で指導案を考えたことがなかったので、自分の考えだけでなく、『こんな考えもあるのか』『こんな方法もあるのか』と気づくことができたのは、自分の考えの幅も広がり、興味深かったです。」「みんなで考えると他の人の意見やアイデアが知れて、それを踏まえて考えると新たな考えが浮かんできたので教師になった際には周りの先生方に相談することは大事なんだと感じました。協力することで自分が何ができでできないのか少しですが理解することができました。」「教科書だけで学ぶよりも、生徒が楽しく興味を持って取り組んで、記憶に残ると思うのでよいと思う。また、一つの作業で学べるものが多くあるので、良いと思う。」

感想にもあるように、共同で授業案を考えた経験がない学習者にこのような経験をさせ得たことはよかったと言える。

(3)「食品の種類、その生産地である地名・国名とその位置を再学習できる」について

6名の学生（全員がチラシの切り貼りに参加した）が何らかについて言及していた。以下、例を挙げる。「日本）北海道は他都府県に比べて何でもそろっている。各都道府県で生産量が多い食品が出ている。世界）大陸ごとに野菜・肉などバランスよく取れている。」「世界では国の気候が変わることによって産地が変わることがわかった。国の特色や海に面していることで、産地が変わると思った。日本では北海道が様々な

面で目立っていると思った。」「日本）北海道：野菜、四国：魚類、奈良：柿、長野：ブドウ、青森：リンゴ／世界）オーストラリア：牛肉、メキシコ：アボカド、アメリカ：ブドウ、南アフリカ：グレープフルーツ、ノルウェー・チリ：サーモン、フィリピン：バナナ、パイン」

研究1同様、これらの気づきに加え、地図を見て国・地域の場所を同定するなどする機会を持つことができていた。

3.6 まとめと課題

授業の様子および感想から見て、研究2においても、学生は概ね好意的に受け止め、授業者が期待した効果も実現できたと考えられる。研究1で課題であった時間配分等については、「グループ人数の調整と時間制限」の改定を加えたことによって、より適切に行うことができた。

残された課題としては、複数の教科への同時適用を可能にするような教員側の働きかけの工夫が実践できなかったことが挙げられる。またこの問題とも関連するが、異なる教科間での意見交換を通じた交流を進めるような、運営上の工夫が必要であると考えられる。これらは、次年度以降さらに検討すべき課題である。

謝辞

本研究は、一般社団法人北海道私立大学教職課程協会研究助成金（令和元年度）を受けて行われた。

参考文献

[1] 工藤与志文（1993）. スーパーのチラシで「世界食品輸入地図」を作ろう わかる授業の創造1(3), 46-48.  
 [2] 工藤与志文（1996）. 「実践報告」への補足 わかる

授業の創造 3(1), 13-14.

- [3] マークポイント六法. 教育職員免許法施行規則, <http://roppou.mark-point.jp/条文/教育職員免許法施行規則.html> (2019/12/31閲覧)
- [4] 文部科学省 (2006). 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm) (2019/3/12閲覧)
- [5] 日本大百科全書. <https://kotobank.jp/word/教員養成制度-1524450> (2019/12/31閲覧)
- [6] 野坂吉則 (1996). チラシ・広告を使った社会科の授業 わかる授業の創造 3(1), 2-12.
- [7] 渡辺良子 (1993). スーパーのチラシで「食品輸入地図」作り わかる授業の創造 1(4), 11-17.

## 注釈

- (1) ただし, これはパーソナル・コミュニケーションによるため, 当該学生の進路変更の真の理由が「職場の忙しさ」によるものなのかはわからないことには注意を要する.

付録 配布したプリント

身近な材料を教材化しよう（１）

【スーパーのチラシの活用】

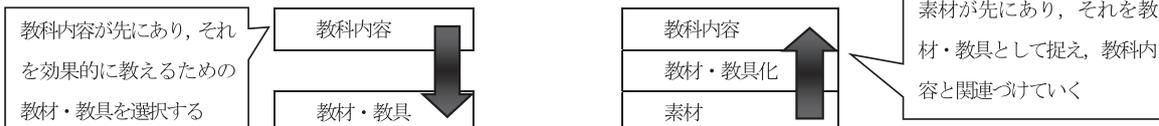
1. 教材と教具、教材化（復習？）

1) 定義

教材とは：学習者の学習活動の対象となる，教科内容を具体化した素材や事実

教具とは：教科内容の理解を促進するため，学習活動に用いられる道具

2) 教科内容と教材・教具との関係



例) 教科書，資料集を使うなど  
実験や実技を行うなど

例) 新聞記事，絵本，マンガ，映像資料，  
身の回りの出来事など何でも

|  |  |
|--|--|
| <p>利点</p> <p>①学習指導要領に準拠している</p> <p>②既存のよく考えられた教材・教具を使うことができる</p> <p>③平等な教育内容が保障される</p> | <p>利点</p> <p>①学習者の興味・関心・意欲を引き出すことが可能となる。</p> <p>②地域性やクラス，個々の学習者の状況を考慮することが可能となる。</p> <p>③教員の創意工夫が最大限に活かされる</p> |
| <p>欠点</p> <p>①学習者の興味・関心・意欲と合わないかも知れない。</p> <p>②地域性やクラス，個々の学習者の状況と合わないかも知れない。</p>       | <p>欠点</p> <p>①学習指導要領や教科内容に合わせるための工夫が必要となる。</p> <p>②適切な素材探しが必要となる。</p>  |

2. 今日の作業

①スーパーのチラシから，産地がわかる食品を切り抜く

②切り抜いた食品を地図（世界地図，日本地図）に貼る

**注意** ビジュアル的に美しく，わかりやすくするよう工夫する

同一食品が同一場所に複数個ある場合は，貼り方を工夫する

③切り・貼りながら，気がついたことをまとめる。

学習シート（１） ※記述スペースは省略

|  |    |
|--|----|
| 学籍番号   | 氏名 |
| ①食品の産地や食品の種類などについて気づいたこと。  |    |
| ②この作業を中学生あるいは高校生にさせるとしたら，配慮あるいは注意が必要なこと。<br>教員はどういうことをあらかじめ考えて準備しておくべきか。 |    |
| ③感想  |    |

身近な材料を教材化しよう(2)

【スーパーのチラシの活用】

1. 教科内容との関連を考えて目標をたてよう

① 下記の学習指導要領解説(例)なら、どこと関連付けできそうか?

→関連づきそうな箇所に、アンダーラインを引いてみる。

② チラシを切り貼りする活動、あるいは貼った結果を活用するなら、何をその時間の教育目標にしたらいいか?

→「本時の目標」を設定しよう。

〔商業〕

(3) 経済と流通

ア 経済の基本概念

ここでは、土地、資本、労働力といった生産要素の概要と希少性、経済主体の役割、生産、流通、消費などの経済活動の循環、トレード・オフ、機会費用及び市場における価格の決定と変動の仕組みについて扱う。

イ 流通の役割

ここでは、流通の役割について、生活水準の向上や生産の高度化などによる生産と消費の隔たりの拡大と関連付けて扱う。また、卸売業と小売業の分類と機能及び小売業の業態の変化について扱う。さらに、情報技術の進歩に伴う流通の効率化と最適化について、具体的な事例を用いて扱う。

ウ 流通を支える活動

ここでは、物流活動、金融及び保険の働きや仕組みについて扱う。また、合理的な流通管理や円滑なサービスの提供を可能にしている情報システムの概要について、具体的な事例を用いて扱う。(以下略)

2. 指導プランを立ててみよう(グループワーク)

条件① 本時の目標を明示する

条件② チラシを切り貼りする時間、あるいはチラシを観察する時間の配分を考える

条件③ 生徒が議論をする時間をとる→主体的な学び

条件④ 本時のまとめを明示する→チラシから生徒に理解してほしいことを明確にする

| 時間配分 | 生徒の活動 | 教師の活動 |
|------|-------|-------|
| 導入   |       |       |
| 展開   |       |       |
| 終結   |       |       |

※商業・社会グループ向け

2. 生徒同士がコミュニケーションをするための材料を作ろう(3人組ワーク)

条件① タスク解決型コミュニケーションの手法を使う

例「北海道のおいしい食べ物を海外からのゲストに英語で紹介しよう」

→北海道人役とゲスト役をつくるなど

「北海道の食べ物を海外に売り込み、海外の食べ物を買う交渉を英語でしよう」

→北海道ビジネスマン役と海外ビジネスマン役をつくるなど

「この食べ物は何でしょう(食べ物の名前を言わずに特徴を説明して当てさせる)」

→説明者役と質問者役をつくるなど

条件② 教えた文法表現と単語を決め、必ず使うようにする

条件③ モデルとなるスキットを作る

※英語グループ向け

**Practicing “the Practical Seminar in Education”  
in the Teachers’ Training Course and Its Issues:  
Using the Plan for the Class of “Let’s Make the World Map of Imported  
Foods Using Fliers of Supermarkets” as a Teaching Material**

Hiroko MASUDA<sup>1</sup>

**Abstract**

“The practical seminar in Education” is stated as the compulsory for the students in the teachers’ training course. It is important to fulfill the following conditions to practice the seminar; that is: for the busy students who have the attitude for being a teacher but not so much motivated studying hard, to make them engaged in some activities, and through it to have them study something useful in their future by discovering, communication, and noticing. From this viewpoint, the plan for the class of “Let’s make the world map of imported foods” was carried out. This plan was proposed in Kudo (1993) and practiced in Watanabe (1993) and Nosaka (1996) for the pupils of elementary school. The effects expected in this plan were as follows: (1) Students could learn how to construct their teaching material from their raw materials, (2) They could experience the active and initiative class, and (3) They could learn the variation of imported foods, moreover, they could re-learn the name and location of the food producing district. By analysing both the observation of students’ activity and their opinions on the class, the expected 3 effects were observed in Study 1. But there were some issues remained both in applying this plan to 3 different categories of students, and in distributing the proper time to the given activities. This issue points were emended in Study 2, and the expected 3 effects were observed as well. From these results, the effectiveness of this plan for university students also were illustrated.

**Keywords:** University Students, “the Practical Seminar in Education”, Educational plan of “Let’s Make the World Map of Imported Foods”, Teaching-Materialization of Raw Materials, the Active Learning.

---

<sup>1</sup>Department of Human Sciences, Sapporo Gakuin University; masuda@sgu.ac.jp.

